

支店長の わがまち紹介 第83回



水田の中に建つ小さな神社

河内町

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとの密接な繋がりを持たせていただいております。「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。

今回は茨城県稲敷郡河内町です。龍ヶ崎支店長が河内町長 雑賀正光氏にお話を伺いました。

河内町は第44回(2017年3月)の本コーナーで紹介させていただきました。改めまして、河内町の魅力や特徴、展望についてお聞かせください。

(取材日:2020年3月23日)



河内町長 雑賀 正光氏



龍ヶ崎支店長 生田目 均

■ 空と緑と金色の穂平線が見えるまち

関東一の米どころ茨城県の中でも特に優良な穀倉地帯である河内町は、夏は広がる青田と突き抜ける空の中に筑波山を望み、冬は夕焼けに染まる新利根川の彼方に富士山が姿を現し、秋ともなれば黄金色の稲穂が見渡す限り水平線まで波打つ、そんな美しい風景が広がるまちです。

本町は都心から約50km、筑波研究学園都市から約30km、成田国際空港から約20kmと好立地にあ

りますが、近年、首都圏中央連絡自動車道と東関東自動車道が結ばれたことでアクセス性がさらに向上し、都心がより身近な存在となりました。

今後さらなる交流人口の増加と経済効果の発現に向け、「都会に意外と近いイナカ 穂平線の見える町」として本町をアピールしています。

■ 消滅可能性都市からの挑戦

本町は平成22年の国勢調査の結果を基に、日本創成会議が発表した「消滅可能性都市」896市区町村の中の一つに、残念ながら位置付けられました。また、平成22年からの30年間における20~39歳女性の人口減少率推計が県内ワースト3位、さらに世帯数や1世帯当たりの人数も減少してしまうなど、危機的な状況にあります。

そのため、平成29年度に策定した第5次河内町総合計画では、「かわち革命・消滅可能性都市からの挑戦」を基本理念として掲げました。

本町が20年、30年先も存続できるよう、人口減少や産業構造の変化などの課題に真摯に向き合い、前例にとらわれない発想と果敢に挑戦する心構えで、まちの持っている強みを最大限に活かし、誰もが誇れるまちを目指しています。

■ 唯一無二の教育体制でまちを一つに

まちは必ずしも大きければ良いというものではありません。内容の濃い施策をまちのすみずみまで行き渡らせること、それが本来の行政の姿であると私は考えています。平成の大合併時に本町は合併を選びませんでした。逆に合併しなかったからこそできることもあります。その一つが教育体制の充実です。

人口減少は本町だけの問題ではありません。現在多くの市町村で、少子化に伴う小中学校の統合が進んでいます。当然本町でも統合を考えていました。

しかし、私は単に少子化対策としての統合ではなく、まちが一つにまとまることを統合の最大の目的であると位置付けました。そして、「どこからでも通える小さなまち」という利点を活かして町内に所在する小中学校の全5校を統合し、小中一貫校「かわち学園」を創設しました。

「子はかすがい」ということわざもありますが、人は子どもを通してつながることができるのです。そして、子どもがいる場所には人が集うものです。そのため、本町ではかわち学園を「地域コミュニティの核」、まちを盛り上げていくための「ツール」と考えています。



樹齢300年を超す樺から作られたモニュメント

もちろん、今後、本町が合併せずに存続すると断言することはできません。未来においては、近隣市町村と合併することもあるかもしれません。そうなった場合には、河内町の歴史や文化は、しだいに薄れていってしまう恐れがあります。

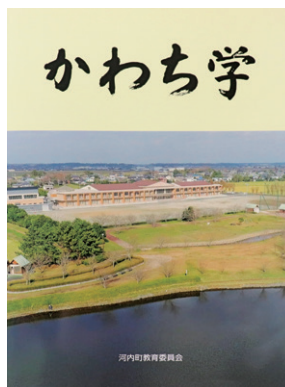
しかし、そうであってもかわち学園は必ず残ると考えています。それというのも、同学園は美しい「水と緑のふれあい公園」に隣接しており、校舎は日本画の大家、藤島博文先生から多くの助言をいただき、どれだけ時間が経過しても古さを感じさせないようデザインされて造られているからです。

さらに、全教室が南側に配置され、天井の高さ

を十分にとったことで、子ども達が明るい環境のなかで学習できるよう開放的な空間を創出しています。

また、昇降口から入って左手の吹き抜けにある大きな木のモニュメントは、本町の歴史を後世に残そうと尽力している大野教育長の屋敷にあった樹齢300年を超す樺を譲り受け、作られたものです。このモニュメントは、将来の夢や希望に向かって大きく力強く伸びていく河内の子ども達を表しています。

かわち学園では、「夢や希望をもち、自ら考え行動できる児童・生徒の育成」を教育目標として掲げ、英語教育やICT教育、勤労生産的教育をはじめ、さまざまな教育方法で授業を進めていますが、なかでも特徴的な教育が「かわち学」です。



かわち学副読本

かわち学は、これまで本町が歩んできた歴史やまちの特徴などをまとめたものです。この郷土学習教材を活用し、1年生から9年生*までがふるさとである本町を深く学びながら体験することは、ほかの市町村ではできない教育方法であると考えています。

本町は小さなまちではありますが、大正デモクラシーを追い風に広まった大正自由教育運動においては、金江津小学校(当時)の校長先生を中心とした稲敷郡同好会所属の教育者たちが、現在の教育の基本となる「金江津の体験教育」を実践するなど、素晴らしい歴史があります。

また、地理的な面での特徴もあります。例えば「鬼怒川」は、かつて「衣川」という表記で本町内を流れていました。当時と現在の地図を見比べてみると、衣川の流れに沿って地盤の強い部分に住宅が建てられていることがわかります。現在、衣川は地名として残されているだけですが、改めて人間の賢さ、受け継がれてきた歴史を感じています。

本町は、良くも悪くも利根川と共に生きてきたまちです。かわち学園の子ども達は、利根川の堤防を辿りながら水害を含めたこのまちの歴史を知るための体験学習も行っています。町内に点在する水田の中に建つ小さな神社は、この町が水と闘い、水を征し、水と共存してきたことを物語っています。

私は、このようにかわち学でまちの歴史を学び



新利根川と朝日

つつ体験することで郷土愛が醸成され、また、水と共に暮らすまちについての知識を深めることで、目の前で起こる事柄に対して、自分自身で解決できる能力が身につくと期待しています。

また、かわち学の活性化を目的に、第一線を退いた町民の方々に「かわち学^{まな}びすと」への登録をお願いしています。かわち学園の子ども達に得意分野の知識や技術を提供していただくことで、子ども達の見識をさらに広げたいと考えています。

さらに、町内の二つのこども園を一つに統合し、新たなこども園の建設を計画しています。場所はかわち学園と同じく、水と緑のふれあい公園の隣接地を予定しており、遊具なども含めて、子ども達が通いたいと思えるような夢のあるこども園にしたいと考えています。完成後は、かわち学園を含めた一帯を本町の「教育の聖地」として位置付けたいと考えています。

教育の成果は直ぐに出るものではないため、目標を持って継続していく必要があります。幸い、本町の教育関係者は優秀な方ばかりですので、次の時代にバトンタッチできるようなシステムを作りあげることができると考えています。

■ メガファームでまちの産業を興す

今、日本では農業従事者の高齢化や後継者不足が叫ばれており、産業の中心が稲作である本町も同様の問題を抱えています。そんな中、茨城県が進める「茨城モデル水稲メガファーム育成事業」に本町の金江津地区の担い手が選定されました。これを受け、本町では農地の集積・集約化を進め若い担い手の育成支援に取り組んでいます。

茨城モデル水稲メガファーム育成事業とは、中規模な稲作経営体に農地の集積・集約化への支援を行いながら、僅か3年という短い期間で100ha規模の大規模水稲経営体を育成し、「儲かる農業」の実現を目指す事業です。

現在、県では本町の金江津地区のほか、稲敷市の東地区、潮来市の潮来地区、結城市の結城用土地改良区地区の4地区の対象エリアで実施しています。

この事業で期待される効果としては、農地を集約化することで、いびつで使い勝手の悪かった農地やあちこちに点在する農地での作業がなくなり、作業の効率化が図られることです。さらに、県の示す条件を満たせば、ドローンや水管理に使う水田センサーといったICT導入費用の補助を受けることもできます。

金江津地区では、約53haまで集積されてきましたが、令和4年3月末までに100ha規模になるよう、本町は今後も可能な限りバックアップしていくつもりです。

■ 日本の食を支える

昨年末に中国広東省で発生し、瞬く間に世界中に広がった新型コロナウイルス感染症は、現在も猛威を振るっています。このような状況下において、多くの方がマスクの入手に苦慮しています。

これまで、日本政府は経済活動を優先する政策を数多く打ち出してきました。しかしながら、今回のことで、どのようなものであっても「自国生産」が大切であると思いついたことなのでしょう。

これを教訓に、国は、何が大切か、どのような支援が必要かなどについて、改めて見直す必要があるのではないかと考えています。

今の時代、あれば便利でも、なければなくてよいものは数多くあります。しかし、いつの時代でも食料だけはそうはいきません。人間が生きていくうえで食料は必要不可欠なものの一つです。

本県は日本で3番目の農業立県であり、日本の食を支えていると言っても過言ではありません。その中でも、穀倉地帯である本町の果たす役割は、今後さらに重要になっていくと考えています。

■ 筑波銀行に期待することをお聞かせください

経済活動において銀行の役割は、人間でいえば心臓です。人間は血液が循環しないと生きていけないように、経済にはお金を回す役割を担う銀行が必要です。

筑波銀行はその自覚を持ったうえで、農業従事者も含めた本町の企業に対して、ご指導や必要な支援策の実施をお願いいたします。

写真提供：河内町